
フードさんの日常

ヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フードさんの日常

【Nコード】

N3844Q

【作者名】

ヒスイ

【あらすじ】

女装してる王子様に惚れられた

素顔をフードで隠してる一見男のような アスカ 女

異世界にトリップしてお店をのんびり営む

女の子の日常です

自己紹介

初めまして 私はアスカと言います

18歳で高校を卒業して大学に行くぞとゆう時にトリップしちゃった女です はい

でも親切な人に拾ってもらってなんとか生き延びることができた私はラルシア国で何とか自分の店を細々ながら持てる事になりました

そんな私が前と違う事はいつもフードを深くかぶって顔をできるだけみせないことと

男装・・・とまではいきませんが性別がわかりにくくなっていることだけです

フードは拾ってくれた人がしてなさいと言ってくれたんですけど

私はそんなに見れない顔なのかな・・・

それに加えて身長が女にしては高い私は顔も見れないことも相まって周りには男の人と思われてることも多いんですよね

別に隠してる訳じゃないんですけどね

まあ、性別とかそんなに気にしてる訳じゃないからいいですけど、男として過ごすのも楽しいし

そんな私は今日も頑張っていますよ！

第一話

「お父様ー！お父様ー！」

ラルシア国のお城に響きわたるその声を発していたのは金髪に青い眼のドレスをきた美女・・・いえ違いました

この国の第一王子 ディエラ王子でした

「何だ そんな大声を出して」

そう言って返したのはラルシア国王でありディアラの父リスランです。

ディアラが女装をしてもわが子だからと広い心で容認しているいい父親であり
穏やかないい国王です

ディアラ王子が王に向かって言葉を続けます

「わたくし、好きな人ができました！！」

「・・・男か？女か？」

息子の突然の告白に面くらいなながらも冷静に相手の性別を聞きました

さすがです！ 王様

「女のかたです」

「・・・お前が女を好きになったのか」

「ええ、性別が男でこれほど嬉しかったことはありません!!」

「そうか・・・」

王様は少々変わっている息子がまともな初恋をしていることに感動し、息子が好きになった相手の事を聞きました

「で、相手はどんな人だ？」

「アスカさん って人です！」

「・・・外見は？」

「いつも顔をフードで隠されてるのでわかりませんが」

「・・・そうか」

王様はやはり少々変わっている息子が女性を好きになっただけでも十分だとおもう事にしました

「はい！では今日も会いにいきますね！」

「ああ・・・頑張ってこい」

「はい！行ってきます！」

そう言っつて王様は生暖かい目で息子を見送りました

デイエラ王子は城を抜け出し好きな人のいる城下町へとくりだして
行きました

所変わりましたデイエラ王子の向かう城下町にある小さな店 黒猫

には店主の

アスカがおりました

見ただけでは男か女かわからず本人もあまり自分から話さないこと
から

近所の人やお客さんにはそのスラリとした身長から男性ではないか
と思われるアスカでした

第二話

うん 今日もいい天気だなあ

私は部屋に差し込んできた朝日に気づき目をさます
ベットから起き上がりパジャマを脱ぎ普段着であるフード付きの服
を着る

最近ではフードで顔を隠すことにも違和感はなくなり

異世界での生活にも慣れてきた

男みたいな格好だけど・・・周りからも男性だと思われてるし・・・
いや でも男装も結構楽しいからいいんだ うん

さあ、今日も仕事仕事！

私は自分の店である 黒猫 に行く準備をする

店の名前の由来は一緒にトリップした愛猫からとったものだ

黒猫のクロちゃん・友達からは安直すぎ、って言われたけど分か
りやすくいいと思う

黒猫 は基本色々な物を売っている 雑貨屋？まあ色々な物を売
っている

そんなことよりも気になるのは最近よく来てくれるお客さんだ

金髪青い目の凄い美人さんのお客さん

ディエラさんといってなんと王子様で男の人だった事を教えてもら
った時は

本当に驚いた

でも別にいろんな人がいる世の中だからディアエラさんみたいな人がいてもいいと思う
それに私も男っぽいと言われた事もあるし今現在周りから男だと思われているので
まあべつにいいんじゃないかと

ディアエラさんに言ったらなんか懐かれたのか好かれたのかわからな
いが

ほぼ毎日お店に来てくれるようになった

私もディアエラさんの事は好きなので問題ないし楽しい
・・・恋愛感情の好きも混じっている・・・

黒猫 へと行き 営業中 の札をかける

すると少ししてドアが開き来店の印のベルがチリンチリンと鳴った

「いらっしやい ディアエラさん」

「こっ・っ・こんにちは」

少し顔を赤くしてどもりながらも返してくれたディアエラさんは
男の人だとゆうのに文句なく綺麗だった

「いつも僕の店に来てくれてありがとう」

にこりと微笑みかけながらディアエラさんに声をかける

一人称が僕なのは商売をするのは男だと思ってもらったほうが
好都合だからだ

「・・・ええ この店は素敵ですから」

「それは良かった」

「お茶飲みますか？お菓子も用意してますよ」

「いただきます・・・アスカさんのお茶は美味しいですから」

そういつてくれると嬉しい

この世界に来てから時間があるので自分の趣味に時間をかけてみたいする

今日は紅茶と手作りケーキだ

「はい どうぞ」

ディエラさんの座っている机へと運んで行く

「ありがとうございます」

「食べてみて？ 感想が聞きたいから」

「はい」

ディエラさんは返事をしてケーキを食べ始めた

甘い物を食べる時のディエラさんは本当に幸せそうで可愛い

「美味しい・・・すごく美味しいです」

そういつて微笑んでくれたディエラさんは蕩けそうな笑顔だ

「そう言ってくれると嬉しいな・・・」

素直な感想が嬉しくて頬を緩めながらディエラさんが店にきた理由が気になり聞く

「そういえば・・・何か用があった？」

ディエラさんは用があつて店に来たのだろうか？

「用がないと・・・来ちゃダメですか？」

ディエラさんが少し気落ちしたような声で答えた
・・・少し悲しそうな顔に心が痛む

「そんなことないよ 来てくれるだけで嬉しいから」

好きな人が来てくれて嫌なんてことは絶対ない うん

そう直ぐに言うとディエラさんはペアっと花のような笑顔になった

「本当ですか！？私・・・毎日きても迷惑じゃないですか！？」

「うん すっごい嬉しいよ」

「嬉しいです！！よかった・・・」

安心した声のディエラさんにホッとしながら話しかける

「じゃあ・・・店の品物で気に入った物があったらいつてね 店の奥でいるから」

「はい 分かりました」

そんな会話をして店の奥へと入る・・・
頼まれていた物を作る作業を始める

お得意様から頼まれたブローチを完成させにかかる

黒猫 は基本作れる物は依頼がくると作るから色んな物を作って
売っている

もう殆ど出来ていたブローチを完成させ、同時進行で作っていた髪飾りを作業機の
引き出しから取り出す

・・・ディエラさんへのプレゼントだ

デザインを考えているうちに偶然できたこのデザインの髪飾りはディエラさんに

似合うと思ったから勢いで作ってしまった・・・

淡い水色の宝石と銀を基調としたそのデザインはディエラさんの髪によく似合うだろうな

そんなふうに想像しながら完成させていたら時間が結構たってしまっていた

「もう ディエラさん帰る時間かな・・・」

そう呟いてディエラさんのいる方へ髪飾りを持って行く

「ディエラさん もう帰らないといけない時間だね」

少しぼうつと考え事をしていたディエラさんは我にかえって返事を

かえしてくれた

「・・・そうですね 残念ですけど帰らないと・・・」

そう言って外へ出ようとしたディエラさん呼び止める

「ちょっと待って これ作ってみただ、プレゼント」

ディエラさんを引き寄せて髪飾りを髪につけた ディエラさんとは身長が同じ位か

少し高いかなので顔が近づくと

ちょうどいい位置につけた髪飾りはディエラさんの映えていた

・・・想像以上に似合ってる 綺麗だな・・・

「・・・これ・・・その・・・お代は」

赤く頬を染めたディエラさんが聞いてきた

・・・プレゼントにお金取る訳ないんだけど・・・

「お代はいいよ 僕が勝手に作ったんだから よく似合ってるし」

「そうですか・・・？・・・嬉しいです・・・大事にしますね」

微笑みながら言ってくれた言葉に嬉しくなった

「本当にありがとうございました・・・宝物にしますね」

「そう言ってくれると嬉しいよ また来てね」

もっと一緒にいたかったけどなぐでも仕方ないよね、王子だし・・・

「はい。・・・もう帰らねいそうですね　じゃあ・・・さようなら」

ディエラさんは嬉しそうに帰って行った

・・・また何か作ってプレゼントしよう

あんなにいい笑顔くれたんだからお金をもらつどころかこつちが払わないのだよ・・・

第三話 デイエラ side

アスカさん

それが私の好きな人の名前

この地域では聞かない名前なので遠い地域の出身なのかと思う
アスカさんは教えてくれないけれど

でもアスカさんが何者だっただいいのです

私は優しくて強い貴女に恋をしたのだから

初めて逢ったのは私が城下町にきていた時ふと目についたこの店に
入った時です

店のドアを開けるとチリンチリンとベルの音がなり

「いらつしゃいませ」

そう声をかけてきたのはフードを被り顔の見えないアスカさんでした。
た。

その時私は綺麗な声だな、と思ってたんです。

男性とも女性とも取れる声で凜とした透き通った声だったんです。

アスカさんに言うところとちょっとズレてると言われましたけど

顔を隠しているくらい気にすることでもありませんし・・・

アスカさんの性別は女性だと教えていただきました。

それからアスカさんと話をしたり店の商品を見せてもらったりして
すっかり「黒猫」が気に入って

城下町に来るたびに寄って、そうしているうちにアスカさんを好きになった。

でも好きになればなるほど自分は男だと言い出しにくくなっていった。

言えば嫌われるんじゃないかと思っただら怖くて怖くて仕方なかった。ずっとこのままでいたいと思っただけどやっぱりそう上手くはいかないくて

ある日おこった事が切欠で男だとばれてしまいました。

アスカさんは私が男だと知っても何も変わらず接してくれた。

それが嬉しくて仕方なかったけど私は男として意識されていないのだと痛感しました。

自分でも男らしいとはお世辞にも言えません。

ですから性別がバレたその日から私は少しずつ男らしくなるための勉強を始めました。

目指すは父様のようなカツコイイ男性です。

アスカさんに好きになってもらうのが最大の目標です。

第三話 デイ・エス・サイド (後書き)

久しぶりすぎる投稿・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3844q/>

フードさんの日常

2011年9月10日03時53分発行